

『とりかへばや』論

—宮の宰相の機能—

大倉 比呂志

一

『とりかへばや』における主人公は、当然のことながら女大将(男尚侍と入れ替わった後は、原則として今尚侍と称する)であると考えられるわけだが、実は女大将という異形の女性を本来のそれに解放した原点は、女大将の友人である宮の宰相であると思われる。そのような意味において、宮の宰相は男尚侍(女大将と入れ替わった後は、原則として今大将と称する)以上の機能を物語において果たしている指摘することができるもの、では宮の宰相はどのような機能を果たすべく造型されているのだろうか。それを解明していくのが小稿の論述の中心となる。

二

男装の女大将は父親の兄である右大臣の四君と結婚し、表面上は何の問題もないはずだが、その様相は、宮の宰相の視点から、

①(女大将が)うち嘆きて、身を思ひ知りつる名残、いたくながめ入る気色、かばかり思ふことなげなる身に何の飽かぬことと世とともに嘆かしきならん、

とあり、傍線部に宮の宰相の不審が語られている。これ以前に既に四君の父親右大臣の視線を通して、

……(1・一九〇)^①

②いと人目に見えていまめかしくまつはれたまふことぞ殊になく、ただあてやかにめやすきほどの御仲らひに見ゆるは、(四君ノ)かばかり飽かぬことなき御有様を、幾千夜重ぬとも飽くまじきを、思ふほどよりはと見ゆれど、男君はまだいと若くものしたまへば、さこそは過ぐしたまへどもつつましく思さるるなめり、など罪もなくことわりて、もてかしづきたまふさま世に類なし。(1・一八六—一八七)

と女大将への期待はずれが語られていると同時に、①で宮の宰相が女大将に抱いた不審感はその後増殖していくのである。

ところで、女大将と男尚侍とが合奏し、それを聞いていた宮の宰相が、男尚侍の琴の音の素晴らしさに「そぞろに涙こぼれて忍ぶべくもあらねど、^①『真屋のあまり』をうちうそぶきて反橋の方にたち出でた」(1・二〇三)ところ、

③中納言(女大将)、琵琶をふと取りかへて、「押し開きて来ませ」[㊦]と掻き鳴らしたなり。(1・203)

とあるごとく、二個所の傍線部は催馬楽(東屋)の「東屋の真屋のあまりの雨そそき 我立ち濡れぬ 殿戸開かせ」¹「^{かすがひ}錠も ^{とぎし}錠もあらばこそ その殿戸 我鎖さめ おし開いて来ませ 我や人妻」²の部分であるわけだが、傍線部③が私は他人の妻ではなく、あなたのものだという意味であって、女大将は宮の宰相の傍線部④の文句に対してからかいのつもりでつぶやいたわけだが、それが後述する四君闖入犯し事件並びに女大将犯し事件の伏線となっているのではなからうか。

この直後に、宮の宰相は男尚侍への恋情を訴えようとして女大将を訪れるものの、女大将が留守で、箏の琴がかすかに聞こえてきたので、以前から思いを寄せていた四君を垣間見たところ、四君が「春の夜も見る我からの月なれば心尽くしの影となりけり」(1・206)という独詠歌を口ずさんでいるのを聞き、

④(四君ノ)父母とてもあまたの中にすぐれたる思ひ限りなかなり、見る人(夫の女大将)とてもさばかりめでたくすぐれて、ゆきかかづらふ所もなくいとあまり世づかぬまでまめやかなるを、(四君ノ詠ンダ歌ハ)何事の心尽くしなるにか、と聞くに、……(1・206)

とあるごとく、何の苦悩もないはずの四君がなぜ「心尽くし」なのか不審を抱き、さらに前述したごとく、『押し開きて来ませ』という催馬楽の一節を女大将がからかい気味につぶやいたのを宮の宰相は想起して、四君の部屋の妻戸を「押し開けて、つままず歩み入りたまふを」(1・206)

とあるように、この傍線部が催馬楽と類似した表現である点を考えると、そこに宮の宰相の闖入が暗示されているのではなからうか。だからこそ、宮の宰相は我慢できずに四君に近付き、犯すのである。その結果、宮の宰相は重ねて不審を抱くのだ。というのは、四君が処女であったからだ。宮の宰相はそのことが理解できず、

⑤なほ中納言はあやしかりける人かな、いみじうまめなるはこの人(四君)に心ざしの類なきとのみ思ひしを、さま異なりける聖心にこそありけれど、めづらかにもさまさまおぼゆ。(1・208)

という感懐を抱き、さらに、

⑥さて中納言のあさからず見えながらいかなりけることぞよと、ありし夜のほどにこそ中納言も泣き沈むらめ、大方の人柄は、いとめでたく目もあやにすぐれてなつかしう愛敬づきながら、かやうの方(注「肉体関係」)は、あながちにもとねたくうち思ひ放ちて情け情けしくもてなして過ぐすなりつらんかし、と思ひやるも、いとめづらかにありがたかりける人(女大将)の心なり、……(1・211)

と、なぜ女大将は素晴らしい人柄で文句もつけようもないのに、四君と肉体関係を持つとうとしないのかと不審を抱くのである。その原点は四君が処女であるという点だった。これは宮の宰相にとって第二の不審であると言えよう。とすれば、第一の不審とは何か。それは既に①④で触れたように、女大将と四君とが表面的には理想的な夫婦であると看取されながらも、二人とも嘆息している状況を宮の宰相が目当たりにした点であろう。その後、女大将は四君の妊娠に驚愕し、女大将夫婦は疎遠状態となる。

ところで、唐からの帰国後、謀反の疑いをかけられ、吉野の地に隠遁した吉野宮のことを女大將は噂に聞いて、吉野を尋ねるわけだが、女大將の将来に関して、

⑦「……この世に世を嘆き人を恨むるなん、いと心幼くむげに悟りなきことにはべるべき。さらに思し厭ふべき御ことにもはべらず、つひには思ひのごと上を極めたまふべき契り、いと高くものしたまふめり。……」(1・239)

と吉野宮は発言しているが、傍線部は女大將がやがて中宮の位につくこと(巻四)を示唆しているのであり、「姫君たちの人めき出でたまはんしるべなり」(1・238)と吉野宮は女大將の本性を察知して、二人の姫君を女大將に紹介し、女大將は吉野姉君に同性愛的行為を仕掛けるものの、二人とも各々の美貌に驚嘆した後、宮は女大將の将来を察知して、「世になく、この世に伝はらぬ薬ども、あるかぎりたてまつりたまふ」(1・251)たのだ。⁽⁵⁾その薬とは、後に「夜に三寸髪かならず生ふとありしを、かからんものぞと思して持ちたまへるして、日々に洗ひてこの薬をつくるに」(3・三二六)と語られているごとく、毛生え薬であった。とすれば、ここで女大將が女性に戻ることが示唆されていることになろう。

ちなみに、四君が第一子を出産し、その産養の夜、宮の宰相が四君のもとに忍び込んだ折、

⑧あやし、かばかりの人を心にまかせて見つつ、などて疎かりけん、さばかりの容貌のにはひやかにたをやぎをかしきには違ひて、いみじうものまめやかにあやしきまでもてをさめて、いといたうものを思ひ乱れたるさまの常にあるは、いかばかりのことを思ひしめて他に移ろふ心のなかるらんと、ゆかし

きことぞ限りなきや。(2・263―264)

と語られているように、宮の宰相は犯した四君が処女であったのであり、女大將があれば魅力的であるにもかかわらず、好色ではなく、憂愁を帯びているのかと、再度不審を抱くのである。宮の宰相は好色者であるために、男尚侍を女だと思つて言い寄つたものの、冷たくあしらわれた結果、女大將の美しさに魅せられたのは当然のことだが、その女大將が男尚侍と「つゆも違はぬ顔つき」(2・269)をしているために、男尚侍の代用として女大將に言い寄り、そのしどけなくつろいだ姿に女大將の本性を見抜いて激情し、女大將を犯したのだ。その結果、宮の宰相は女大將と四君という擬制夫婦の二人の処女を奪つたのであり、そこに従来にはない目新しさが盛り込まれているのだ。その後、女大將は妊娠したために、宮の宰相に報告したところ、女の姿に戻ることが提案されたが、

⑨まいて人(宮の宰相)の心きはめて頼もしげなく、あまりあだめき過ぎて好ましう色めき、ただ今だに(四君へ)心ざし劣らぬさまに絶えずひき忍ぶる心いと深し、まして、今はこれはかうぞかしとおだしう常のことと目馴れて、つらい心も見えんときは、いかばかりかはものの悔しう、人笑はれなるべき、と思ひ続けるに、宰相の語らひにつかんことは、なほいとものし。(2・二九七)

と、女大將の葛藤するありようが語られている。だが結局、宮の宰相の勧めによって宇治に身を隠すことになる。

一方、男尚侍も女大將を捜すために、人前に出ることを恥じらっていたのに、「人はただ大方の世の響きばかりこそ歩くめれ、まことに心に入れ

て尋ねぬにこそあめれ」(3・三四一)と決意して、母親にも「例ならずいとあるべかしうのたま」(3・三四二)いて、本来の男の姿に戻るのである。男尚侍は女大将の消息を知るべく吉野に出発するわけだが、その途次宇治で女大将に似た人物を見かけるものの、確証もなく、女大将の方もその人物を男尚侍ではないかと疑うが、それを確かめるすべもない状態であった。女房達が女大将が立ち寄った(これは実は男尚侍が吉野に行く途中であった)と宮の宰相に進言したところ、宮の宰相は不審を抱くものの、四君の妊娠のことで都と宇治とを往復していたために、余裕がなかったのだらうか、その不審は持続しないのである。やがて、吉野に女大将の手紙が届き、男尚侍は秘密裡に宇治へ赴き、女大将と再会し、女大将は宇治から吉野に失踪するわけだが、その失踪に対して、

⑩さても心合はせ知りたる人なくてはいかでか出でたまひけん、さりととも知りてこそありけめ、いかなりけることぞと思へど、心得ず。……人のまねび聞こゆるに、おのが様に身をもてなし馴らひてただや出でておはしつらんと思ひつるだに少しあやしかりつるを、ましていかなることぞと思ふに、いますこし胸心惑ひて思ひやらむ方なし。(3・三九三—三九四)

とあり、傍線部のごとく、宮の宰相は不審を抱くのだ。ところで、男尚侍は「あてにかをり気高く、なまめかしき方添ひて」おり、女大将は「はなばなとほこりに」という差異はあるものの、「ただ同じものとのみ見えて取りも違へつべうものしたまふ」(以上、1・一六六)という類似性のために、女大将と男尚侍とが入れ替わることが可能であったと考えられるが、二人が今尚侍と今大将とに入れ替わって本来の性に戻った時、父左大臣の「とりかへばやの御嘆き」(3・三九九)は一応解消す

るのである。しかし、この入れ替わりはかなりの危険性を内包していたはずだ。というのは、今大将が四君に逢った折、契ろうとしたために、四君は今大将を「女大将ト」異人とは思ひ寄るべきにもあら」(3・四〇九)ぬものの、今大将の視点から、「おびえ騒ぐべきほどならねば、(四君ノ)嘆き乱れたるけはひしるきを、げにあやしからんとあはれに思す」(3・四一〇)とあるように、四君が今大将に不審を抱いているのであらうと語られ、さらに、

⑪これ(今大将)も同じなつかしきなまめきさまなれど、さすがにまことの男はまた様ことなることにや、(四君ハ)あやしとのみ思すに、あやしく心得がたしとかへすがへす思さるるに忍びかね、

見しままのありしそれとおおぼえぬはわが身やあらぬ人や変はれるとうち嘆きたまへるに、思ひあやめらるるふしあるべしと、(今大将ハ)をかしくもことわりにもおぼえて、

ひとつにもあらぬ心の乱れてやありしそれにもあらずとは思ふと、いとど(今尚侍ニ)まねび似せたまへば、分くべくぞあらぬや。(3・四一一—四一二)

と傍線部のように不審に思った四君が贈歌したのに対して、二重傍線部から今大将は四君が不審に思っているのではないかと察知して、今尚侍の口調に似せて言ったので、四君にはその差異がわからなくなったと語られている。とすれば、この入れ替わりはかなり危険性を伴っていたと理解されよう。今尚侍の身近にいた人物である四君と宮の宰相に対して、今大将は過剰とも言えるほどの神経を使うのだ。それは次のような例によってもうかがわれよう。

⑫(今大将ガ) といみじくあざあざときよらにほひ、かをりなまめきたるこ
とさへ添ひにけりと見ゆるに、(宮の宰相ハ) 目もくるる心地してうちまぼる
に、見あはせて、いかにあやしとこの中納言(宮の宰相) 思ふらんと思ふに、
我も気色うち変はる心地して、いとすくよかにもてしづめて、(宮の宰相ハ)
いかなる隙にもを言ひより気色見んと異事なく目をつけて見れど、(今大
将ハ) さ思ふべしと心得て、(宮の宰相ニ) 立ち止まりもの言ひ寄るべくもあ
らず。(3・四一三―四一四)

とあるように、今大将がかつての女大将とは相違しているのを、女大将と
情交の経験がある宮の宰相に看破されないように、今大将は神経を使っ
ているのだ。その結果、宮の宰相は今大将をかつての女大将だと錯覚して、
「我をこそひたぶるに思ひ捨てたまはめ、若君を、さる人ありきかしと、
いかなりにけんと思ふべくやあらむと思ふに、恨めしくかなしく、人わ
ろく涙にくれて出でたま」(3・四一四)うのである。さらに、今尚侍に対
する宮の宰相の「見てもまた袖の涙ぞせきやらぬ身を宇治川に沈み果てな
で」(3・四一四)の贈歌に対して、今大将は「ありしそれとこそ見れど、
をかしくもいとほしくもおぼ」(3・四一四―四一五)えたのであり、そこ
に宮の宰相に看破されなかったという安堵を感じると同時に、宮の宰相に
さらなる不審を抱かせないためにも、『たださ思はせて、御返りは、心と
き人にて見あやむるやうにもぞはべる、これ聞こえたまへ』(3・四一五)
と細心の注意を払って、今大将は今尚侍に「心から浮かべる舟を恨みつ
身を宇治川に日をも経しかな」(3・四一五)の返歌を書かせるのであるが、
宮の宰相はその策略に引っかけかかって見抜けなかったために、今大将の宮の
宰相の不審に対する予防線は効を奏したのである。

一方、以前から帝も女大将に対して、「さらに御覽せではあるまじく、
わりなき御心地せさせたま」い、女大将を「飽く世なく御覽せまほしけれ
ば、無期に出でさせたまはぬ」(以上、2・二八一)わけだが、東宮は入れ
替わった今尚侍に対して「宮は、異人とはた思し寄るべきならねば」(4・
四一九)、「聞こえ出でたまへるけはひも、違ふところなかりければ、いか
でかは思ほしも寄らん」(4・四二〇)とあるように、今尚侍が今大将から
の東宮あての手紙を見せるまでは入れ替わりに気付いていないのである。
さらに、帝は今尚侍に対面したところ、垣間見した折の「ありつる面影も
身を離れぬ心地すれば」(4・四三四)をはじめとして、「ありつる面影も
を離れぬ心地せさせたまふ」(4・四三五)、「ありし面影のみ身を離れぬ心
地せさせたまひて」(4・四三六)と何度も語られているように、帝は今尚
侍の「面影」を忘れることができず、今尚侍に執着している様子が強調さ
れている。そこで、入れ替わりを知らない帝は今大将や父親の左大臣に対
して今尚侍の入内を談判したところ、左大臣はその申し出に喜ぶものの、

⑬なほもて出でてたてまつらんなどは(左大臣ガ) 思ひたまはぬも、あやしう、
(今尚侍ヲ) ほのかに見しにも、(今尚侍ハ) いとさいふばかりのものづつみに
はあらざりしを、人のかしづきむすめなどの、あはれに過ぎてもて出ではな
やかならんはうたてこそあるべけれど、なほあやしくぞ思さるべき。(4・
四四三)

という帝の心中思惟にもあるように、なぜ左大臣が娘の今尚侍の入内を渋
っているのかと不審を抱くわけだが、帝は今尚侍と情交を結んだところ、
今尚侍が処女ではなかったために、

⑭いなや、いかなりけることぞと、なま心劣りもしぬべきことぞ交じりたるや。大臣の、(今尚侍ヲ)あながちにもて離れあらぬさまにもてなしもかくてなりけり、かくとの乱れによりて、さすがにかくとはえうち出づまじきことのみさまなれば、(今尚侍ヲ)かたはなるもの恥ぢにことづけたりけり、とぞ思し寄りける。(4・四五二)

という帝の心中思惟が語られている。左大臣が今尚侍の入内に積極的になれなかったのは、娘である今尚侍の非処女を知っていて、引込み思案を理由にしていたのだと帝は納得するのである。これは帝の誤解であるわけだが、帝は帝なりに自分の不審に対して解答を与えようとしたのである。後になって今尚侍の非処女の真相は、今尚侍が若君に泣きながら話しているのを帝は見えて、「この若君はさはこの宮の御腹なりけり」(4・五一四)と推察して、若君が今尚侍と宮の宰相との間の子であったことを知り、今尚侍の父親が宮の宰相の好色性や四君との密通事件から、二人の結婚を許可しなかったのだと帝は帝なりに納得するのである。このように誤解に基づいているとはいえ、若君の所生に関して帝は納得したために、今尚侍との間での「うち重ねて御殿籠りぬ」(4・五一七)という状況は、帝の今まで知らずにいたことを知ったという満足感を表象する記号であると同時に、今後、今尚侍を独占するという意志の表出であったと考えられよう。

入れ替わり後において、宮の宰相は今尚侍にいかなる態度を取ろうとしているのだろうか。宮の宰相が入れ替わりを知らない四君の乳母子である左衛門と会った折、彼女の口を通して、女大将と四君との関係が同性愛とでもいえる女同士が語り合うような状態で、少し不安であったが、失踪した女大将(実は入れ替わった今大将)が戻ってからは以前とは比較できな

いほど愛情が増さり、特に四君の妊娠後には今大将の愛情が一段と増加し、今大将の父親左大臣も以前とは異なって、今回は四君に気遣いをし、四君の父親も非常に喜んでおり、宮の宰相からの手紙に四君は見向きもしないと語られていることに対する宮の宰相の心中思惟は、

⑮御心のうちには、女君のただならずなりたまふらんことをうちはじめ、この人(左衛門)の言ひ続けることを聞きたまふにも、かへすがへす心得がたく、いかなることぞと思し乱るるに、……(4・四七三)

とあり、特に四君の妊娠に関して不審を抱くのである。さらに、宮の宰相の心中は「女大将ノ件ノ」一筋にだにあらず、方々心得がたきことをさへとり重ね思し続けるに」(4・四七四)とあるごとく、四君の夫である今大将に不審を抱き、常に今大将の動向に注意を払っていたところ、麗景殿の女との逢引きを目撃したために、「いなや、さればこはいかなることぞ、……もし、なほあらぬ人にやと」(4・四七九―四八〇)今大将は女大将とは別人なのではないかという疑いを抱くのである。だからこそ、それを確かめるために、今大将に声をかけるのだが、それは次のように語られている。

⑯押しのかたるよそ目こそあれ、かうやうに近やかにてもなどのたまへるには、まことの男はまたしるきわざなるを、かへすがへすあやしくて、とみにも(今大将ヲ)許さで立ちたまへり。(女大将ガ宇治ヲ失踪シタ)ありし後、またかばかり近くて見たてまつることもなきに、やうやう明けはなる空の気色くもりなきにつづく^①と見たまへば、御髭のわたりなどことのほかに気色ばみけるも、いなや、こは誰そ、さらばありし人はいづちへ失せたまひにしぞと、かへすがへす心得がたくて、とばかりまぼり立てるを、……(4・四

宮の宰相は今大将に身近に接近し、⁽⁶⁾今大将の様子を見たところ、二個所の二重傍線部に表象されているように、今大将の〈男〉性を見たのであって、現在の今大将は女大将とは別人だという思いを強くするのである。だからこそ、「いかにもこの人（今大将）はありし同じ（女大将ノ）ゆかりにはものしたまふべし」（4・四八二）と推測し、事の真相を確かめるために今大将邸のある二条に出向いたのだ。そこで吉野姫君達を垣間見、合奏を聞き、彼女達に魅了されるわけだが、今大将は「昔隈なかりし御心も名残なくまめにな」（4・四六七―四六八）⁽⁷⁾った宮の宰相に対して、

⑭なほこの中の君（吉野妹君）をや中納言（宮の宰相）にあはせてまし、内侍の督の君（今尚侍）もさりげなくてこの若君（女大将と宮の宰相との間の子）のこ
とをいとおぼつかなく思したるにも、さやうのゆかりならではいかでか聞き
たまふべきなど、やうやう思したる。（4・四八八―四八九）

とあるように、今大将は宮の宰相を吉野妹君と結婚させようと決心するのである。だがその根底には、⑯で引用したごとく、今大将は宮の宰相につきまとわれ、入れ替わりが暴露されるのではないかという危惧を抱いたために、彼を今大将側に取り込むことによって、口封じをしようとしたのではないのか。だが、宮の宰相の不審は解消されたわけではなく、女大将の失踪した事情を確かめるために、結婚した吉野妹君に女大将のことを尋ねるものの、妹君の反応は、

⑰「ただ、あるやうあらんと思せかし。聞きあきらめたまへりとても、絶え果てたまひなん野中の清水は、汲みあらためたまはんことありがたからんもの

ゆゑ、御心のうちの苦しさもいとどまさり、人の御名の世に漏らんもいとよ
しなし」とて、言ひ出でぬほどの心やましさを、せん方なき。（4・五〇八）

と語られているごとく、宮の宰相を冷静にあしらっており、それに対して宮の宰相は「なかなか、行方なく思はんよりは知りながらのたまはぬよと思ふ心やましさを言はん方なきや」（4・五〇八―五〇九）と不審を解明できないもどかしさを感じながらも、それを徹底的に追究することを断念せざるをえないような状況だったのだ。このように入れ替わりの事実が外部に漏れるのを防止するという機能を宮の宰相と吉野妹君との結婚が担っていたのだ。

巻四の巻末近くで、女大将と宮の宰相との間にできた若君を、今尚侍は常に「若君の何心なかりし御笑み顔思し出」（4・四九九）で、今は吉野妹君に引き取られ、我が子でありながら帝との間にできた若君達とは身分差のある若君に不憫さを覚えて、今尚侍は声をかけ、自分が母親であることを示唆する。その若君が乳母に対して、

⑱「まろが親にやとおぼゆる人をこそ見たてまつりつれ。『殿（宮の宰相）には、な申しそ』とありつれば、申すまじ」とて、いとあはれと思して涙を一目浮けてのたまふに、……「御容貌有様はいと若くうつくしげにて、この母上（若君の養母である吉野妹君）よりもいますこし愛敬づきけだかくものしたまへる。さぞとのたまひ知らすることはなかりつれど、ただ、『母といふものは世にはありとばかりは思ひ出でよ』とていみじう泣きたまへる」とて、いとあはれに思したる御気色にて、なほいづくにものしたまへるとはのたまひ出でぬを、……（4・五一八）

と曖昧に言うわけだが、宮の宰相は今尚侍が今大将と入れ替わって中宮になっていないことも知らずに、物語は終息する。とすれば、宮の宰相は女大将の所在を知らないまままで終わることになる。

三

以上のように、この物語は宮の宰相の不審が始まり、不審で終わる作品であり、それは女大将にまつわる不審であった。その点において緻密な計算のもとで作品が構成されていると言えよう。

そこで男尚侍の人物造型に関して、

男尚侍は、男に戻った後急速に卑俗化して、平凡な好色の権勢家に墮してしまふ。彼の女装は、対人恐怖症だった彼に男として生きる力が養われるまでの、いわば隠れ蓑であったに過ぎず、女としての経歴は、その人間性に何一つはねかえって来ないのである。⁽⁸⁾

と適確に指摘されているように、男尚侍の印象は薄く、女大将を〈表の主人公〉と仮定すれば、宮の宰相の女大将に対する不審の増殖が物語を展開させていく上での起爆剤としての機能を帯びていると考えられるところから、宮の宰相は〈裏の主人公〉もしくは〈影の主人公〉として評価されるべきではなからうか。題名の『とりかへばや』は女大将と男尚侍の父親である左大臣が、活発な女大将と内向的な男尚侍とを取り替えたいと思っ「かへすがへす、とりかへばやと思されける」(1・一六八)ことに由来しているわけだが、実はこの入れ替わりを実現させた契機は、宮の宰相の女大将への犯しに起因しているのだ。とすれば、宮の宰相を〈影の主人公〉と呼ぶことがふさわしいと言えよう。特に、女大将と男尚侍の入れ替わり

後において、宮の宰相の女大将に対する不審に照射されている点に注目すると、〈表の主人公〉が女大将と入れ替わった感を抱かせるのである。とすれば、『とりかへばや』は女大将と男尚侍の入れ替わりだけではなく、後半部分における〈表の主人公〉のそれをも内包しているのではなからうか。そのような意味において、従来以上に宮の宰相の機能の大きさを評価すべきだと考えられる。そこに『とりかへばや』における人物造型の特色を見ることができよう。

注(1) 『とりかへばや』の本文は新編日本古典文学全集により、算用数字は巻、

漢数字は該当ページを示す。なお、私に表記の一部を改めた箇所がある。

(2) 催馬楽の本文は新編日本古典文学全集による。

(3) 女大将の連絡を待ちながら、吉野に滞在している男尚侍にも、吉野宮は『大将ももとの御有様になりたまひぬらん。いとかしこく国母の位にきはめたまふべき相おはせし人なり』(3・三五八―三五九)と、女大将に対する発言と同様のことを語っている。

(4) 女大将が吉野を訪問する以前に、「さりともおのづからいささかもめき出でたまふ道のしるべは必ず出できなんと、心に深く思し悟りて、契り定めたる人を持たんやうに思しけり」(1・二三二)とあるように、吉野宮は二人の姫君達の結婚を考えていたことがわかる。

(5) 女大将が出産直前に吉野に出かけて行った時にも、「御薬たてまつりたまふ」(3・三一六)と同様な記事がある。

(6) 巻二において、宮の宰相が強引に男尚侍の顔を見た状況は、「あながちにも見つる御顔は、ただ中納言(女大将)の、いま少しあてにかをりすみたる気色添ひて、心にくくなまめきまさされり」(2・二六七)と語られている。

(7) 他に「この人(宮の宰相)の今は逢ひての恋も逢はぬ嘆きもうち忘れて
をさをさうち乱るることもなくてまめだち歩くめるにや許してまし」
(4・四七五)、「さこそ名残なくまめになりにし御心なれど」(4・四八五)
と語られている。

(8) 新日本古典文学大系『とりかへばや物語』解説

〔追記〕

脱稿後に、久保堅一『今とりかへばや』宰相中将論―薫の執着の継承―(『国
語と国文学』二〇一一・4)が、女大将に対する宮の宰相は「執着や欲望の面でも、
実に薫的な相貌を呈している」と宮の宰相を新たな視点から論じているのが目に
とまった。

(おおくら ひろし 日本語日本文学科)